

本日の箇所、手紙の著者はコロサイの信徒達に「憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても赦し合いなさい。」(12～13節)といった姿勢を求めています。しかし、一方的に善行を求められて、簡単に従えるほど、人の心はお利口には出来ていません。「善をなそうという意志はありますが、それを実行できません。…善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます」(ローマ7章18・21節)というパウロの言葉が思い出されます。善行に気乗りしない理由の一つには、それに見合うだけの見返りが相手から期待できないということがあるかもしれません。それどころか、恩を仇で返されるようなこと、こちらが一生懸命考えてやってきたことが感謝されず、むしろ批判されてしまうようなことだってあるかもしれないのです。

青山学院大学の塩谷直也先生は、「失恋」を例に挙げながら、「努力した分、欲しいものが手に入るわけではない」現実を指摘されます。しかしその経験を通して初めて、「愛することの切なさや深い意味合いを知り、これからは失恋した友人に対して、口先だけではなく、心からの言葉をかけられる謙虚さが身についた」という事実も指摘されます。「努力した分、不思議な『報い』が天から降り注ぐ。履歴書には載らない、あなたの見えない特技が増えていくんだ。」と塩谷先生は語ります。

キリスト教は、見返りを求めない愛の宗教だとよく言われます。半分当たっていますが、半分間違っているでしょう。23～24節には、「何をすることも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。あなたがたは、御国を受け継ぐという報いを主から受けることを知っています。」とあります。何より、イエスご自身が、「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」(マタイ6章3節)、「あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。」(ルカ6章35節)と語っておられます。確かに聖書は、人に対する見返りを求めないように勧めますが、神に対して報いを求めることを許しているのです。

神の報いこそが頼れる望みです。教会は、私たちは、「主キリストに仕えているのです」(24節)から。

(文責：望月達朗牧師)

